

3D関西だより

No. 19 2015.07.26

夏の例会を開きました

夏の例会を7月26日に開きました。参加者は15人でした。今回から席の配列を3D視聴用に変えました。3Dを鑑賞するにはスクリーンに映る画像の縦の長さの3倍以上の距離から見るのがよいと言われるので、全員がその条件を満たして、しかもできるだけスクリーンの中心線上から離れないように配置をしました。従来は最初の話し合いをした場所に座ったまま、上映に移ることが多かったのですが、そうするとかなり斜め方向からスクリーン上の画像を見る人もいて、作者の意図した立体画像を正しく見ていないことになるので、今回から席の配置を上記のように変えたわけです。

また今回からお茶とお菓子を用意するのをやめました。これは作品上映中に菓子などをポリポリ食べたりするのは、一生懸命作品を作った作者に対して失礼ではないか、もっとまじめに鑑賞すべきだというご意見にしがったものです。今後もお茶の用意はいたしませんので、例会中にお茶を必要とする方はご自分でご用意されるようお願いいたします。



3DC安全基準を満たす作品作り

最近の例会に発表された作品のなかに、ときどき3DCの安全基準からはずれて目に負担のかかるものがあります。3DCの安全基準は国際的に共通のもので、3Dのコンテンツを作る場合は基本的に守らなければならないものです。

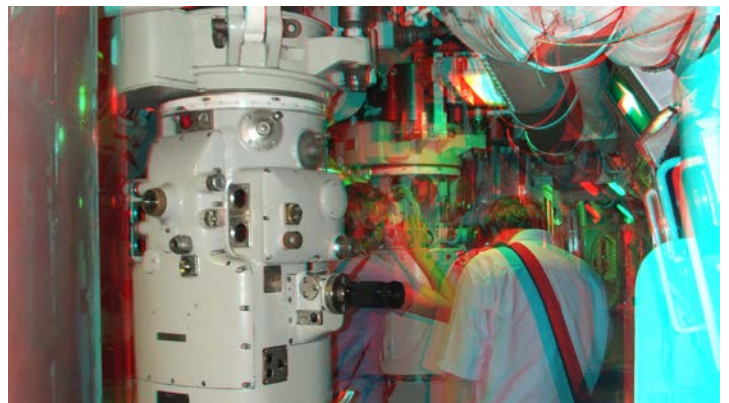
その第1点は、左右像のずれの最大値が画像の横幅の2.9%以内におさまっていることです。画像の横幅が1920ピクセルの場合、2.9%は57ピクセルとなります。これ以上ずれていると、目にかかる負担が大きくなり、長時間の視聴に向かないと考えられます。

3Dの作品を仕上げるとき、まず、いちばん近い被写体の像がモニター上でずれないように左右方向の調節をします。これができた段階で、今度はいちばん遠い被写体のずれを見ます。このずれが画像幅の2.9%におさまっていればよいのです。

ずれが画像幅の2.9%におさまらない作品は、撮影時のステレオベースが大きすぎるのです。特に近い被写体を撮影する場合、遠景がバックに入ると、この危険が増大します。ステレオベース計算機などで適正な値を求めて撮影することをお勧めします。

この紙面の左欄に載せた例会のスナップの3D写真はW3で撮ったものですが、後ろのほうの人の像は2.5mmぐらいずれています。この写真の横幅は96mmですから、その2.9%は2.8mmで、安全基準内におさまっています。しかしこの画面にもっと遠い物が写り込んでいたら、多分それは安全基準から外れるだろうと考えられます。

第2点は、画像の右端や左端に近い物が写り込まないようにすることです。これは狭いごちゃごちゃした場所で撮るとよく起こります。下の写真はオランダの軍事博物館で撮った潜水艦内部の写真ですが、左と右に近くの方が写り込んで、非常に見づらい写真になっています。



それでこの写真の左端と右端と上部も少しカットして、下の写真のように仕上げると、スッキリします。

